

# 令和7年度 気仙光陵支援学校 校内研究

## 研究テーマ

「関心別のチームによる学び合いを通じた  
教師エージェンシーの向上」

### 1 主題設定の理由

OECDは「生徒エージェンシー」を、変化を起こすために自ら目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力と定義し、ウェルビーイングの実現に不可欠な資質と位置づけている。これは家族や仲間、教師との相互作用を通じて育まれる「共同エージェンシー」によって形成されるため、教師自身にも主体的に学び、変化を生み出す力＝「教師エージェンシー」が求められる。また、本校では児童生徒数減少、学部間の児童生徒の実態差の拡大、職員の多忙化、研修機会の確保などの課題があり、これらに柔軟に対応するため、学部や寄宿舎を越えた関心別チームによる学び合いを通して教師エージェンシーを高める必要があった。

### 2 目的

#### (1) 研究の目的

関心別のチームによる学び合いにより教師エージェンシーが高まるか検証する。

#### (2) 実践の目的

各チームの課題に取り組み、授業や支援、学校課題等の改善を図る。

### 3 方法

#### (1) 教師エージェンシーについて

自己評価アンケートを4月と12月に実施し、比較した。アンケートは、教師エージェンシーを評価する15項目で構成され、各職員が5件法で回答した。

#### (2) チーム実践について

各学部、寄宿舎の所属に関係なく、関心や課題意識を共有するメンバーでチームを編成した。各チーム4～7名で、「体育」「性教育」「ICT/AI」「働き方改革」など計11チームが編成された。

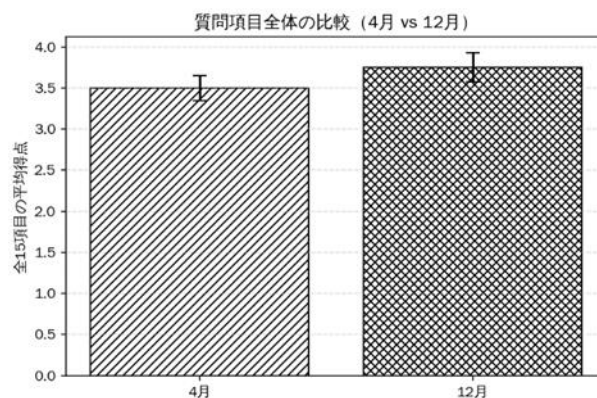
毎月の研究日に各チームで、学習会、指導案検討、教材研究、授業紹介、授業の振り返り、授業者支援会議、事例研究などを行った。

### 4 結果

#### (1) 教師エージェンシーについて

全質問の平均得点を算出し、4月と12月を比較した結果、12月は4月に比べて有意に高かった(差の平均 = +0.253、 $t(54)=2.580$ 、 $p=0.0126$ 、

95%CI [0.057, 0.450]、効果量  $d_z=0.348$ )。効果量は小～中程度であり、全体として統計的に向上が確認された。



特に、以下の項目で有意な向上が見られた。

- ・「ICTや新しいツールを使って、授業や支援を改善しようと努力している」
- ・「校内研究や同僚との議論を通じて、自分の授業や支援を改善するアイデアを得ている」
- ・「学校全体の方針に貢献する形で、自分の意見を積極的に提案している」

#### (2) チーム実践について

各チームの主体的な取り組みにより、学部・寄宿舎を越えた情報共有や連携、授業・支援の改善、学習会の企画などがなされた。実践内容は、校内研究通信や desknet's NEO などで共有された。

### 5 考察

関心別チームによる学び合いは、教師エージェンシー向上にポジティブな影響を与えた。一方、効果量は中程度であり、今後はエージェンシーをさらに発揮するための仕組みづくりが課題である。

### 6 講演会

以下の講演会を通して、校内研究に関する概念について理解を深めた。

演題：教師のエージェンシーとリフレクション  
講師：国立教育政策研究所 研究企画開発部  
特任研究官 千々布 敏弥 氏

期日：令和7年8月1日(金)

参加者：40名

### 7 その他

本研究は、日本教育公務員弘済会岩手支部より「教育研究助成事業 校内研究助成」を受けた。助成金は主にチーム実践を促進するための書籍や研修参加費に使用した。